

「読」と「解」のルール何に注目するか

問

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

1 造型意志が極端に弱いのが、日本の芸術である。日本における美の使徒たちに、そのような意志が微弱にしか育たなかったのは、やはり日本人が堅固な石の家にでなく、壊れやすく朽ちやすく燃えやすい木の家に住んでいることに由来しているかも知れない。彼等は自分たちの生のあかしとしての造型物を、後世に残そうなどとは心がけなかった。

2 たとえば、生花とは造型なのか。たとえそこにいくらかの造型的要素があつたとしてもそれが生花の生命であり、目標であるのか。馬鹿らしい。彫刻や絵画が永遠の造型を目ざしているのに、花というはかない素材で何を造型しようというのか。一ときの美しさを誇つてたちまち花は散るのである。散るからこそ花は美しく、そこに生きた花の短い命との一期の出会いを愛惜することが出来る。造型ではなく、花の命を惜しむことが、生花の極意である。

15 3 あるいはまた、主と客が一室に対座して、一服の茶を喫することに、形を残そうとの願いがいささかでも認められようか。茶室や茶庭や茶碗や茶掛などに、ある造型が認められるとしても、それが茶の湯の目的なのではない。一服の茶を媒介として、

20 そこに美しく凝縮し純化した時間と空間とが作り出されたら、それは客にとつても主にとつても何物にも替えがたい最高度の悦楽で、それこそ生涯の目標とするのに足る、輝かしい生命の発露、一期一会の出会いであつた。

4 造型意志を極小にまで持つて行つた文学は、十七句の発句であらう。だが、芭蕉は発句よりも連句に、自分の生きがいを覚えた。連句はそれこそ自分一個のはからいを極微に止めて、あとはなりゆく自然のままに自分を委ねてしまつた文学なのだ。座の雰囲気（2007年 センター本試験）の純一化が連句を付け合う者たちの楽しみであつて、文台引き卸せば即ち反古とは、芭蕉の日ごろの覚悟であつた。残された懐紙は、座の楽しみの粕に過ぎなかつた。自己を没却し、自然のままに随順し、仲間と楽しみを一つにするところに、やはり茶会と同じ、一期一会の欲びであつた。

（2007年 センター本試験）

問

傍線部「造型ではなく、花の命を惜しむことが、生花の極意である」とあるが、筆者は、この生花に続けて、茶の湯、連句の例を挙げている。それは「一期一会の出会い」を踏まえた上で、日本の芸術のどのような点を強調するためか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 花の命の短さ、茶の湯の主客の対座、連句の中の発句のもつ十七字という極小の単位などにしぼって、芸術における簡素さを強調するため。
- ② 生花とともに愛でる場、茶の湯の主客の対座、連句の座のうちの楽しい雰囲気を取り上げて、芸術における人間関係の豊かさを強調するため。
- ③ 花の短い命、茶の湯の対座、連句を楽しむ時間の短さに注目して、表現された形よりも芸術における刹那性を強調するため。
- ④ 花の短い命と向き合うことと、茶の湯の対座、仲間で作りが合う連座の座とを重ねて、芸術における個々の表現意識の弱さを強調するため。
- ⑤ 生花、茶の湯、連句を、人と物、人と人とが出会う場の価値にかかわらせて、芸術における空間性そのものを強調するため。

